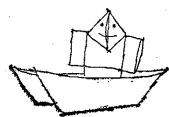


幼児の創造性を伸ばすための絵画製作の指導

——製作を中心として——

馬路やゑ子



はじめに

幼児たちは、常にその全生活の中で、素ぼくで原始的ではあるが、幼児なりに全身でまわりの刺激を受けとめ、さらに全身でぶつかっていろいろとする体当たりの創造的な表現をし、自己の内面にあるものを自由に表出し、さらに新しい世界を創造して、こうとする働きをもっているのではないかと考えられるのである。

しかし、私たちおとなは、普通のごくありきたりの常識の枠の中で、「こうしたほうが」「こうしなければ」と幼児たちのより新鮮な創造的な考え方や、活動の芽を枯らしたり、押えたりしてはいないかと、よく反省をすることである。

これから述べることは、主として、私の製作に関係した指導の実践例ですが、幼児の遊びの発展のあとを、幼児の発達の状態に

従って記述していくことにする。そして、それらの遊びの中で、幼児は教師との関係において、また、幼児たちの関係において、幼児なりに創造性の芽ばえを培っていったことと思うのである。なお、四日市市の公立幼稚園は、五歳児一年保育であるので、この記録も、五歳児・一年保育児の記録である。

(一) 四、五月の実践

この頃の幼児は、まだいろいろの材料になれていないし、用具もまだ十分に使いこなすことができないので、何の抵抗もなく、精一杯の自己表現をさせるには、やはり、幼児たちの、自由な遊びを中心とし、進んでより多くの材料にふれさせることがたいせつだと考え、特に作品を作ることに重点を置かず、いろいろの遊びを通して、自然に、作りたいという欲求をおこさせ、さらに、

積極的な創造活動へと向けていくのがよいのではないかと思う。

このような意味から、二、三の実践をあげてみる。

(1) 包紙でのおはなばたけ

四月十六日

五、六人の幼児たちが、製作コーナーで、包紙の裏に絵をかいていた、そのうちのひとりが「しっぱい！」と言って、くるくるまらめ、その場へ捨てようとした。私は、すぐに「そんなところへすてていいかしら？」といううとしましたが、包紙をただまるめただけでも、立体的で、変化があり、おもしろい型をしていることに気付き、幼児たちにも、いろいろと見方や、考え方を交えることによって個々の幼児の持つイメージに合わせて、想像するおもしろさを味わわせ、さらにそれを土台にして、新しいものを作りだせるのではないかと考え、幼児たちの興味をゆり動かしたいと思いました。

そこで「さあさあ、いまから、おもしろい、てじながはじまりますよ」といって、包紙を適当にちぎり、両手でもってひらひらさせて、「ほうら、たねも、しかけもありますよ」と少しオーバーな表現を試みた。

すると、他のコーナーで、遊んでいた幼児たちも興味ありげに集まってきたので、私は、ますますおどけて、「むにゃむにゃむ

にゃチンブイ」といいながら、包紙を両手の中にまらめ、くしゃくしゃにしました。そして、さも意味ありげに「さあさあ、なにがでてるかあててちょうだい」というと「かみ」「ほうそうし」「くうき」「なんにも」など口々にいうが、教師の考えているような、かいじゅうだとか、動物、花などというようなことは、なかなかいってくれそうもない。そこで、待ちきれず、おもむろに手の中から取り出し、「ほうら、おはながでてきました」といってしまつた。

もしもこの場合、「なにがでてきたかな」と発問したら、もっとちがった方向に発展したとも考えられますが、とにかく私は不用意にお花だといってしまったので、いまさらどうすることもできず、そこで「そうね、あかいし、バラのはなかしら」というと「そんなのかんたんや」とA児、早速包紙をまらめる。他の幼児たちも同じようにまらめだした。

「ぼくのは、きいろやで、タンポポや」「わたしのは、レンゲソウやに」「そんな、おおいれんげそうがあるか」「そんなこといっても、これようけかたまつとんのやに」などといいながらも、うれしそうに、次から次へとたくさんの花を作つた。私も、幼児たちといっしょに、紙をまらめながら、このあとどうしようか、わりばしにつけようか、それともつないで花のれんにしようか、それとも他にないかしらと考えましたが、幼児たちに問題を

返してやろうと思ひ、「いっぱいお花ができたのね、でもこのままじゃお花がかわいそうね、どうしたらいいかしら」というと「せんせい、どっかへはったらええに」といったので、それもおもしろそうだと思ひ、早速模造紙二枚を与えた。

幼児たちは好きなどころへはった。C児「花ばたけみたいや」というと、A児「せんせい、この花、はっぱがないよ」といいながら、空間をぬりつぶす作業をはじめた。それをみて、他の幼児も一生懸命に、ぬりつぶしをはじめ、みんな大よろこびでした。そこで、この作品を、保育室の壁面に飾ることにした。みんなですごく満足のようにあつた。

このような経験は、幼児たちの心の目をゆきぶり、身辺を飾ることにより、デザイン的な芽を育てることができるとは思はないかと思うのである。この活動は、偶発的、突発的で予想されなかった活動ではあつたが、幼児の何気ないしぐさからヒントを得、教師のチャンスをとらえた、サゼッションによって、材料のもつ性質や、働きに応じ、それを活かして、さまざまな形のものを造り出すことが可能になつた経験ではないかと思うのである。

(2) はさみの遠足から小鳥の製作

五月九日

製作コーナーで、はさみの正しい使い方をねらつて、はさみの

遠足ごっこをしていたとき、「せんせい、これ」といつて包紙にある小鳥のデザインをそのまま切つたものを、得意げにみせにきた。「うまくできたわね、これだけなの」ときくと「いっぱいあるよ」という。「そう、じゃ、おともだちにも、きらせてあげてね」というと、得意になつて、みんなの作業しているところへいつたが、おかげで、たくさんの小鳥が集まつた。

しかし同じ型のもので変化がない。この定型的な小鳥を、何かもつと形を変えて、幼児たちの中へ返すことはできないものかしらと思ひ、「あのね、せんせいおもうんだけど、せつかくきつたんだもの、この小鳥さん、なにかして遊べない」というと、Y児は、「せんせい、あのかべに、はつたら」という。私は、小鳥のお家を作つたり、小魚のベープ・サートを作ることでドラマティックプレイのようなものへの発展をひそかに期待して、「そうね、それもいいわね。でももつとほかにないかいいかんがえないかしら」といつてしまつた。みんなも考へているらしいが、思ひ当たらならしい。どうもまだその段階ではないのに気づき、幼児の発言を取りあげ、結局、後の壁面にはることにした。

他の遊びをしていた幼児たちも集まつてきて、いろいろ話し合つてゐる。「せんせい、この小鳥さんたちにかお話ししているみたい」といいだした。それにつられて、他の幼児たちも、「こっちは、えさたべとるみたい」「こっちは、あるいとるみたい」

「これは、ころんだとこみたい」など、思い思いに話をしている。

K児がもつと作りたいといったが、すでに包紙はないので、白画紙の八つ切を渡すとえのぐで大胆に小鳥をかいた。かわくのを待ちかね、切りぬいて壁にはっている。包紙とちがいが、のびのびと自由で、幼児らしい表現でよりのしいものになり、話し合いも、活発になってきた。幼児たち自身が作った小鳥は、大・中・小とさまざまで、お父さん、お母さん、お兄さん、お姉さん、赤ちゃん、感じたことを話し合っていた。

そこで、よいチャンスだと思い、小鳥について積極的に働きかけ、話し合った結果、みんな、小鳥の巣を作るということになり、ありあわせの包紙や新聞紙で巣を作った。男児の四、五人は、積木で巣を作っていた。この場合、なわとか、わらでもあれば適材だと思ったが用意がなくて残念だった。すると、C児が、「せんせい、たまごうんだん」といって、白画紙をまるく切ってきた。それをみたB児、「小鳥より、おおきいんやねえ」D児、「かいじゅうのたまごとちがう」などといながらも、たまごに興味をもち、大・小のたまごをいくつも作った。そのうち、B児があやまって、やぶってしまった。ちよつと、困ったようだったが、すぐ気を取り直して、「このたまご、ひびがはいっこのん」といって、まだやぶれていないところには、マジックできれつを作った。他の幼児たちも模倣をしてやぶったり、きれつを

作ったりした。B児は、今度は、わざとやぶって、「もう赤んぼうがうまれたんやに」といって、小鳥の頭だけを出したりして遊んだ。

まったく、創造性はつきつきと発展して、やむことを知らないのに感心すると共に、指導のむずかしさを痛感させられた。この頃、「子どもの王様」という集団遊びが、当園の園児仲間間で流行していた。数日たったある日、女兒のひとり、帽子のかわりに小鳥の面をつけたらといいだした。早速作って数人の幼児たちと遊んでいると、だんだん人数がふえてきたので、面を五個ほど追加して、六つのグループに別れて、集団遊びをした。この場合、既製の小鳥が、次の新しい製作意欲を刺激し、どうみえる、どう思うといった話し合いが、さらに高い表現へと、むすびついていき、毎日の遊びの中にもまでもはいり込み、幼児たち自身で、その役割を演じることができるようになった。

また、他人の言動や作品なりがきっかけとなり、表現活動が呼びおこされ、お互いに影響を受け、それでいて、ひとりひとりの幼児が、のびのびと思いのままに表現して、そのよろこびを味わうことができるようになったのではないかと思うのである。

(二) 六、七月の実践

この頃の幼児たちは、集団生活へのながれもつだって、自己

主張も強くなってくる。それと共に活動範囲も広くなり、ただ、無気力、無感激に何かをするのではなく、全身でもって、自分の気持を表現しようとしていく。そこで、手先だけの製作活動に終わらさず、全身で活動でき得る素材にウエートをおき、教師と幼児との話し合いから、幼児同士の話し合いへと育て、単純な遊びから、より複雑な造形活動へと、幼児たちの興味を進めていきたいと考えた。

(1) 石ころで作ったおはか

六月二十一日

突然、可愛がっていた亀が死んだ。幼児たちは何となく気落ちしたようであったが、相談の結果、おはかをつくることにした。場所は、つき山のさつきのそばになり、相当大きい亀だったので、みんなで交代して穴を掘り、そつと亀をいれ、土をかぶせたり、水をかけてやったりした。

私はふと、「なにか、おはながあるといいのにね」ということばをもらってしまった。すると、女兒のひとりが、「これでもええ」と草花をとってきた。また、男児の一人は、「せんせい、この石、かめのかたちしてるよ」と、さも、だいじそうにしてもってきた。この石を、おはかの上になてるのかと思っていると、保育室へかけていったが、すぐ戻ってきた。さつきの石に、マジッ

クで、亀のこうらの模様をかいてきた。すると、そばに居合わせた幼児たちも、同じように石をさがしにかけた。大・小の石が、たくさん集まったので、おはかのまわりに並べることになった。

その後、しばらく、石ならべが流行、さらに、大・小いろいろな形の石をみつけてきては、「この石は、かおのかたちしてる」「これは、さかなみたい」「これは、しまがあるの、しまうまや」などと、形をみて、自分のイメージに合わせようとした。このようにして、園庭や、道路におちている石ころのもつ特質を利用し、色づけしたり、形のちがいが、色のちがいをみわけながら、造形的な、リズムを作っていく、石ころのようなものでも、集まると、一つでは表現することのできない世界があることを気付かせることができたのではないかと思うのである。

(2) どんこ遊びでの、カエルのアパート

六月二十九日

久しぶりに雨ががあつたが、園庭には、いくつもの水たまりができていた。幼児たちは、待ちかまえたように、一斉に戸外へでた。

固定遊具も数少ないので、何をするともなく、ぶらぶらしていた七、八人の幼児たちは、急に、水たまりの所に集まり、何か熱

心に始めた。近くにいってみると、豆つぶほどの黒光りしたものが、黄いろくなくなった水面に点々としている。よくみると、黒いものは、ピクピク動いている。ドキンとして、さらによくみると、やっぱりカエルであった。私は、気味の悪いのをがまんして、幼児たちのようすを見守ることにした。みんな、腕まくりをし、土を盛んに運んでくる。その目は、きらきらと輝いている。私も何だか嬉しくなり、気味の悪いのを忘れ、土を運ぶのを手伝った。だんだんと堤防のようなものができ、大きな池がいくつかに区切られてきた。

カエルたちは、何が始まるのかというように、二つの目を水面にじっとさせているのや、ゆうゆうと気持よさそうに泳いでいるものもいる。そこで私は、ふと、「なにをつくっているの」といつてしまった。すると、K児は、「カエルのうち、そして、アパートはこっちだよ」と一段どこまかく区切ったところを指さす。「ほらほら、ちび、こっちへおいで」と、となりの池に移すことに成功し、幼児たちは満足そうである。「ほら、ふねだよ」と、何枚かの木の葉をうかべる幼児、枯枝を、「はし」といつて置いたり、レンガの割れたのをひろってきて並べるなど、次から次へと、幼児たちのイメージは変化しながら遊びが展開されていった。

このドロコ遊びでは、最も原始的なものではあるが、砂場遊

びと平行して、最も自由で、手先だけの活動に終わらず、大きく、全身で活動し、形態や、空間、構造を理解していくことができたのではないかと思うのである。また、平面的な遊びから、立体的な遊びに移行する一つの方法でもあるようである。とくに、この素材は、幼児たち自身でみつけたものであり、興味が、一段と深いので、このような活動を認めてやることにより、さらに自信をもって、表現意欲は高まっていくのではないかと考えられる。

(3) ダンボールでの潜水艇作り

七月十二日

「海にドボン」という童話を聞かせたあとで、聞いたお話をどの程度理解し、どの程度絵に表現できるかと思いい、幼児たちに誘いかけてみた。もちろん、お話を聞いて、それを絵に表現すること自身いろいろと問題はあつた。

たとえば、幼児たち自身感動できる話の内容であるとか、イメージがはっきりしていて表現しやすいストーリーとか、場面などが考えられやすいものであるとか、いろいろの条件はあるが、ここでは、一応それらのことも考慮し、検討した上で、このテーマを与えることの是非についての問題はここでは省略する。材料は、クレパス・マジック・えのぐ、白画紙四つ切を準備し、対象者は、かきたい人、ということにしたのだが、結果的には全員参加する

ことになり、とくに印象の強かった場面を大胆に表現する幼児、ストーリーを追って画紙いっぱい各々の場面をつぎからつぎへと表現する幼児、水色一色にぬりつぶし、小さい舟をちょこんとかく幼児、とさまざまな個性を發揮した表現がみられた。

それから、数日後のことである。ダンボールの空箱を父兄からたくさん頂いた。このダンボールを幼児たちに与えたら、いったいどうするだろうか。何か作ろうといいだすのではないかと興味を持って、わざと保育室の幼児たちの目につく場所へおいた。早速みつけた幼児が、不思議そうに、また、興味ありげに中をのぞいたり、手でさわったりしていた。そこへまた、五、六人の幼児たちがよってきて同じように、さわったり、のぞいたりしている。その中のひとりが、「せんせい、この箱なにをするの」と、聞く。そらきたと内心ドキドキしながら、「あんだたちのすきなようにしていいのよ」とこたえるが早いか、「うわー」と箱の中にはいたり、頭からすっぽりかぶったり、それだけでは、満足できないらしく、いろいろの遊具を中へいれてひっぱったり、おしたり、そうこうするうちに、ダンボールの箱の止め金はずれだし、バラバラになってしまった。

ここまでいかないうちに助言を与えて何かを作るように指導することも一つの方法であるが、私は、あえて、ここでは幼児たちの行動をとことんまで、みまもることにした。そして、もう、こ

の遊びも終止符を打つのだろうと思っただが、意外にも幼児たちは、あきずに、バラバラになったダンボールの上で、ねそべったり、ごろごろころがったりしている。私はさらに新しい表現が生まれるのではないかと興味を覚え、幼児たちの行動をつづけてみまもることにした。

すると、B児が、ダンボールから、床の上へはみだしてしまっただ。「あれしまった。おちてしまった。うみへおちた」といいながらまた、ダンボールの上をころび始めた。どうして海へ落ちたといったのか、そのときは理解できなかった。B児は、何度もころびながら、「りんごやぞ、うみへドブン」といって床の方へわざところびでる。そこで、やっと意味を理解することができた。先日のお話のストーリーを思い出したからである。他の六人の幼児たちもまねをして、「ころころころドブン」といってころびては床へ落ちていく。

私は折角のこの遊びを何とか発展させ、さらにみんなのものにしてやれないものかと思い、「これ、おふねでしょ」と話しかけてみた。「うん、ボク、リンゴ、コックさんがおとしたリンゴやに」「そう、じゃ、コックさんはだれ」というと、それには答えず、ころころころがっては、ドブン、ドブンといて、それを繰り返している。そこで、私は、みんなが理解できるように舟作りに発展しないものかと考え、「ねえ、このおふね、すてきだとお

もうの。でもね、いろをぬったり、まどをつけたりして、もっともっと、すばらしいのにしない」と誘いかけた。「うん、しょに、ほんならぼくせんちようになろっと」「ぼく、コックさん」と口々にいいあいながら、クレパス、マジックインキ、えのぐなどをもちだしたので、私も、どんな舟になるか期待しながら、ビニールの敷物を敷いたりして協力した。

他の遊びをしていた幼児たち四人も、何が始まるのかと興味をもったのか集まってきた。やはり、A児がリーダーになって、何の気がねもなく、ダンボールいっぱい舟の外部をかいいた。B、C児もつられて、窓をつけたりした。参加者もふえて、だんだんにぎやかな舟作りとなり、かいているうちに形は次第に変化して、スクューがいくつもついた潜水艇となった。戸外遊びをしていた女兒たちも、はいつてきて、「うわー、おとこのこたち、じょうずにかいたんやね」と口々にほめていた。そこで、どうして舟を作ったのかと説明してやると、「わたしも、なにか、つくろう」といって、ロッカーの方へいった。そして、個人用の粘土をもちだした。何を作るのか、気にもとめていなかったのだが、しばらくして「おさらとリンゴ、つくったん」ともってきた。「まあ、おいしそうね」というと、「おさらも、はなのもようつけたんやに」と得意そうである。「うわーほんとうね、きれいだわ。きつと、うみのそこのおさかなたちがみつくて、だから

ものだっておもうわよ」というと、幼児たちは、満足そうに席に戻っていく。

一方、舟の方は、えのぐのかわくのを待っていたが、さて、これからどうしようかということになり、みんなで相談する。いろいろ意見がでたが、結局、移動遊具の一部である平均台に、取りつけることにまとまった。そして、しばらく平均台をわたる遊びがつづいた。ところが、また、A児が、なわとびのなわをもちだし、平均台の舟の上から投げる。投げては引っぱる。どうしてあんなことするのかしら、お友だちの顔にでも当たったら大変、と思ひ、中止させようと思った。しかし、A児の顔は、真けんそのものだったし、友だちにも危険でないことを確認したので、何か目的をもってやっているのではと思ひなおし、そのまままもっていた。

A児も私がじつとみているのに気付いたらしく、「さかなつりやに」といった。「あら、こんどはさかなつりがはじまったの。でも、さかながないわね」というと、そのようすをみていたC児が、「せんせい、ええことがあるに」といって、色板を幾枚も、もってきた。しかし、幼児たちはまた、いきづまったようだった。ひとりでひもを投げ、おりていって、魚をひもにくくりつけ、また平均台にあがらなければならない、それで魚つりは、あきらめたようだった。

けれども私は、これらの活動をチャンスとして次に魚作りに発展させることができた。材料は、身近にある廃品を利用、大・小の紙袋、ビニールのあき袋、ポリ容器などで、いろいろの形の魚を作ったのであるが、このように一つの童話が土台となり、一つの異なった素材が刺激となって、新しい製作活動と呼びおこし、幼児たち自身の目と手を通して、さらに、全身でもって、フィクションの世界に没入し、充実した満足感をもたせることができたようである。いつも同じような枠にはまった考え方でなく、幅の広い、そして、素朴な考えを大切にして励まし認めてやり、表現への自信をもたせることも大切ではないかと思うのである。

(三) 二学期の実践

この頃の幼児たちは、他の保育分野との関連の中で、造形活動も盛んになり、計画的、総合的な製作意欲も高まってくる。その中において、自然発生的なグループから、製作のためのグループ構成へ発展したり、常に興味ある経験や、新しい経験を通して、どんどん造形化し、各々の能力を認め合い、理解しようとするようになってくるようである。

そこで、生活の表現を継続的、発展的に扱い、平面、立体表現を交互にさせ、個々の表現活動をさらにグループでの表現活動へ向けさせ、質的向上をはかりたいと思い、つぎのような実践をし

た。

(1) ダンボールでの動物列車 十月十四日

名古屋の東山動物園見学を終え、経験したことを再表現させたいと思い、みんなでいろいろの動物を作ろうと誘いかけてみた。幼児たちもすぐ賛成した。材料集めからはじまり、各々、三〜四人から、四〜五人のグループにわかれ、動物作りに熱中した。小さい石ケンのあき箱をつないだへび、ダンボールの大きいあき箱のぞう、中位の箱のきりん、かめ、ペンギン、ライオンなどいろいろで、しっぽや、毛などは、なわとか、ビニールひもなどを使い、各々の材料のもつ特質を生かし、友だちと話し合いながら工夫して作っていた。完成した動物は積み木のおりの中にいれた。

そこで次には、動物園行きごっこが盛んに展開されることを予想したが、意外にも幼児たちの興味は薄く、盛り上がりはみられず、次第に停滞していった。ただ並んでいる動物は固定化して動きがなく、それよりも自分自身で動物の表現を身体で表現することの方が活気があったようである。数日たったある日、保育室も、このままではせまいので、動物を取りのぞこうと思い、幼児たちとも話し合いの上、片付けることにした。ところがY児がぞうのはなをもって引っぱりだした。それを見たK児も、おもしろがっ

てまねをして引っぱった。他の幼児たちも、きりんのおしりを押ししたり、なわを首にひっかけたりして、室内を引っぱりまわしたので急に活気づいてきた。そこで私は、片付けないでこのまま、のりものごっこへ移行できないものかと思ひ、「ねえ、みんな、どうぶつれっしゃをつくらない」と幼児たちに話しかけたら賛成してくれて、早速動物をひもでつないだり、小さいあき箱の列車を作って、つないだりした。また、ライオン、ヘビ、カメ、ペンギンなども乗せて、引っぱった。

それが動機となつて、もつともつと、いろいろの列車を作る相談がまとまつた。ひかり号①②③号、くだもの列車①②③号、カラーフープによるリング列車も作つた。切符は幼児たちの発想で、キリン列車には、キリンの絵をかいた切符、ぞうは、ぞうの絵をかいた切符といったように、各々の列車の絵をかいた切符作りを熱心したり、売店に必要なキャンデーや、おみやげ、おもちゃなど作つたり、しょくどうしやなども、机や椅子で構成した。

このようにして、のりものごっこへのよい転換となり、次の日は、園庭で、ダイナミックな、のりものごっこが展開された。この場合、動物園ごっこよりもダイナミックな遊びが展開されたというの、やはり、自分自身そのものになり切ることができたからではないかと思う。ここで考えさせられたことは、作ることが

目的で、幾日も幾日もかかつて、いろいろ工夫して作る、そのことに全精力をぶつつけていった場合、できあがったとき、作品を大切にしなければといった先入感から、さらにそれを役割遊びに発展させる場合に、少なからず抵抗があるように思われる。だから外観的にはあまりまとまりはなくとも、幼児たちの納得のいく範囲で、実際に遊べるものにするのがたいせつだと思ふ。そして、みんなで仲よく、協力し合つて、大きな製作をすることは、新しい友だち作りの芽生えともなるのではないかと思ふのである。

この外、自然物を利用した木の葉や、木の実などの動物作りも活動の中にみられたが、紙面の都合上、省略する。さまざまな経験をより豊かにし、用具材料の変化、創造性がフルに発揮できる環境を与え、柔軟性のある物の考え方で、幼児の感情を受けいれながら、これまでの先入観や習慣的なやり方にとらわれないで、新鮮な生活やあそびに役立たせたいと思ふ。

(2) うちわでのペープ・サート作り

十二月五日

ペープ・サートをみんなで作ろうということになり、四〜五人のグループで相談、何を作るか話し合った。相談もまとまつたがさて材料という点で、私はまよつた。それは従来のペープ・サー

トのように平面的なものでなく、もう少し立体感のあふれたものが作れないだろうかということである。あき袋で人形や動物を作ったり紙粘土で動物や人形を作ったこともあるが、紙袋の場合は、作るのは容易であるが、相手にそれが何であるか、理解されにくいし、紙粘土による人形は、容易にできないという問題がある。簡単に相手にわかりやすく、すぐ遊びに展開できるものがないものかと思いをめぐらしているうちに、古いいらなくなつたうちわを利用してらと思ひ立ったので、早速父兄の協力を要請した。

一両日のうちに、大・中・小ささまの、しかもいろいろの形のうちわが集まった。各々のグループで個々の幼児たちが、自分は何を作るか話し合いの後、作るもののイメージに合わせてうちわを選んで早速作業開始した。丸には三匹の子豚での大豚・中豚・小豚、ねずみのよめいりでのねずみたち・お日さま・赤ずきんちゃんでのおばあさん・お母さん・アフリカぞうの親子、四角は、ねずみのよめいりでの風・壁、三角は、おむすびころりんでのおむすび・狼と七匹の子やぎでのお母さんやぎと・子やぎたち、長四角は、狼・おじいさんなどができた。耳、目、鼻、その他、帽子、ずきん、リボン、いろいろな工夫して、よりそのものらしいものを表現することができとてもよかつたと思う。また、かまくらで幼児たちにも扱い易く、自由な遊び場や、グループでのまとまつた遊びの中で、大いに活用されたように思う。

(四) 三学期の実践

この頃の幼児たちは、ただ与えられた環境だけでは満足せず、自分たちで目的、計画をもつていろいろ工夫して遊びに使うものを次々と創作し、新しいルールを生みだし、身近な事物をより正確に捉え、より、リアルなものを表現しようとしてきます。また、この頃になると、幼児らしいアイデアが盛られて、しかも仲間同士の共通意識も強く働き、ある一つの遊びに向かって、寄り合い的、つきあひ的な活動でなく、お互いに話し合いながら生活全体のバランスをも考え合わせ、より複雑な造形活動が生まれてくる。

そこで、さらに抵抗のある材質のものを準備して、進んで抵抗にたち向かっていけるように自信をもたせると共に、新しい自己発見をひきだすように、そしてさらに高次な創造性へと向けていきたいと思う。

なお、実践例については、紙面の都合上省略する。

以上、私の実践したことの中から、簡単に製作に関するもの、ほんの一例をあげたが、幼児のために、どれだけのことをしてあげられたか、深く反省させられるとともに、今後において、さらに充実した実践をしたいと考えている。